

売上げ1150億円!

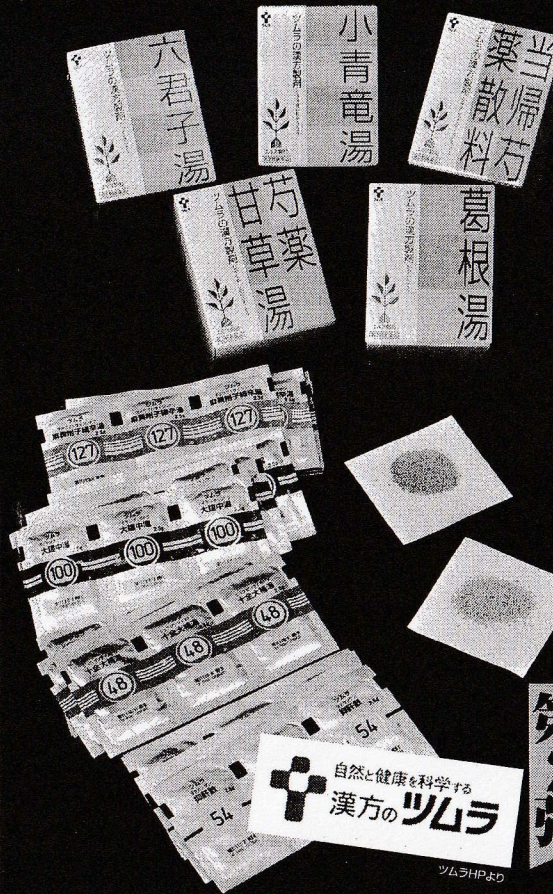
「ツムラ」が国民を欺いた!!

「講習会」で異論の医師を恫喝!!

特集

漢方の大嘘

第2弾



売上げ1150億円、医療用漢方薬のシェア8割を誇る製薬会社「ツムラ」はいかにして日本の漢方業界を“牛耳って”いったのか。異論を恫喝で封じる「講習会」、名ばかりの漢方専門医、次々と大学に設置された寄付講座……。ツムラが国民を欺いた「漢方」の大嘘第2弾。

「効く」から使われているわけではないツムラの漢方薬

「ツムラの漢方エキス製剤は、薬を売らんがための方法です。1976年以降、148処方、漢方薬が保険適用になりましたが、その頃、大学で漢方を教えているところはありませんでした。大学で教えるよりも先に漢方薬が保険適用されてしまったのです。例えるなら、自動車教習所がどこにもないのに、突然、車が売り出された状態。これが、保険漢方をもたらした最大の不幸と言えます」

そう語るのは、「香杏舎銀座クリニック」院長で漢方医の日笠稜氏(66)だ。漢方の大家、山本巖医師に師事して三十数年前から研究を始め、現在は主に自費診療で漢方治療を施している日笠氏。以下、日笠氏自身の体験にも触れながら、ツムラが日本の漢方を歪めていった「構図」と「手法」を明らかにしていきたい。

「保険適用になった当時、漢方の講義は一切行われておらず、今日でも積極的な講義が行われているとは言

週刊新潮

い難い。では漢方の知識を医者に教える役割を果たしたのは誰なのかといえば、それはツムラでした。日本全国で漢方の勉強会を開き、日本東洋医学会の組織強化にも尽力した。それは確かなのですが、企業の目的は収益を上げること。医者に対する漢方教育も、収益を上げるための宣伝活動に他ならないのです」

すなわち、本来、大学で教えるべき医学教育を、利益を追求すべき企業が代わって行ったわけである。ツムラとしては、効率よく漢方を教え、多くの医者に使ってもらわなければ売上げが増えないので、全国各地で医者を集め、講習会を開催した。漢方の研究を始め、たばかりの頃、その講習会に顔を出した日笠氏は驚くべき体験をすることになる。

「漢方業界でメシを食えなくしてやる」——ツムラの社員からそう恫喝されたというのだが、そのシーンを詳しく紹介する前に、まずはツムラが「漢方教育」を

医者に行ったことによる「弊害」について触れておきたい。それは、「方証相対」という、漢方の一部の流派が唱えていた考え方が全国に広められてしまったことです。日本漢方では、患者の症状を「証」と言い、それと処方(方)がセットになっているという意味から「方証相対」といいます。残念ながら、この稚拙な考え方が本場の漢方だと信じている医者が今でもたくさんいます」

後に紹介する「恫喝シーン」とも関係するこの「方証相対」について、「葛根湯」を例にして日笠氏に説明してもらおう。

「漢方の研究を始めた当初、私は葛根湯がなぜ効くのか分かりませんでした。本を読んでも、葛根湯は風邪だけではなく、肩こりにも効く、さらには乳汁分泌作用もある、と書いてある。葛根湯を構成する生薬1つ1つに薬理作用があるため、様々な症状に効果を発揮するのですが、当時はそれが

分からなかったのです」

葛根湯の処方が初めて記載されたのは、今から1800年も前に書かれた中国の古典医学書『傷寒論』。〈背中や肩が机の板のように硬くなり、汗が出なくて風に当たると寒気がする時は、太陽病だから葛根湯で治療しなさい〉

と、書かれている。

「当時は病気が体の表面から内部に入っていく状態によって病気を区別していましたが、『太陽病』とは、病気がまだ体の表面にある状態を指す言葉として理解して下さい。確かに風邪をひいたら背中がぞくぞくして汗が出ない状態、というのはある。しかし、西洋医学では風邪薬を肩こりには使えませんし、さらに『傷寒論』には乳汁分泌に効くとは書いていません」

ところが、「方証相対」の考え方に従えば、

「『傷寒論』の葛根湯の欄に書かれている症状が出ていれば、風邪などの感染症だけではなく、リウマチで

あろうが尋麻疹であろうが葛根湯が効くということになるのです。症状さえ出れば、原因が分からなくてもこの薬、という考え方は明らかにおかしい」

かような疑問を抱いていた頃、日笠氏はツムラが開催している講習会に参加する機会があった。講師を務めていたのは大病院の副院長で、講演のテーマはまさに「方証相対」。質問を受け付けられる段になり、日笠氏はこう訊いた。

「寒気がして肩がこり、汗が出ないような状態であれば葛根湯が効くことは分かりました。では、汗が出ている時はどうすればいいのですか? 寒気ではなく、熱を感じている時はどうすればいいのですか?」

それに対して副院長は、「そんな時は大まかに『証』を捉えて、汗が出ていても葛根湯を使えばいいのです」

と答えたが、日笠氏としては到底納得できなかった。

「汗が出て熱を感じている

時にまで葛根湯が使えるなら、その時点で『方証相対』は破綻しているじゃないですか。『方証相対』はおかしいのではないかと、ついに副院長は口ごもってしまい、講習会終了後、会を主催していたツムラの担当者で地方支店の課長が血相を変えて日笠氏の元に駆け寄ってきたという。

「専門家の先生に来てもらっているのに何てことをしてくれるのだ」と言うので、疑問点を訊いてみた。ただと答えたら、漢方業界でメシを食えなくしてやる」と恫喝されました」

日笠氏はそう述べた。

「恫喝されたことより、ただの課長に過ぎない彼が自分にそれほどの力があると錯覚していることに驚いた記憶があります。ツムラは講習会を通じて医者に漢方理論を教えたので、漢方薬や漢方業界は自分たちの物だという驕りが末端の社員にまで浸透していたのではないのでしょうか」

また、講習会の講師が大